□　統括的展望

寺　西　基　之

2020年の新型コロナウィルス（COVID－19）の発生以来，演奏会の中止や内容変更を余儀なくされるなど，苦難の日々の中で生き残りの道を探ってきた音楽界だったが，2022年は正常化に向かっての大きな流れが生み出された年となった。

■後戻りからのスタートとなった年初め

もっとも年の初めはまだ先がまったく見えない状況にあった。すでに2021年をとおして何度も音楽界再起の動きが起こりながら，そのたびに新たなデルタ株の出現などによる緊急事態宣言やまん延防止等重点措置などの発令に見舞われ，一進一退を繰り広げていた。日本の演奏家たち，音楽団体などの努力でなんとかそうした状況を乗り越え，さらに21年秋ころからは海外からの演奏家の来日も徐々に増えてくるなど，明るい兆しが見え始めた矢先，今度は海外でオミクロン株が流行するようになり，政府は水際対策として2021年11月末に全世界からの外国人の新規入国の禁止措置を発令，音楽界の再起の動きはまたもブレーキがかかってしまった。

こうして2022年は大きな後戻り状態の中でのスタートとなった。外国の演奏家や指揮者，あるいは海外在住の日本人演奏家によって予定されていた公演は国内の演奏家がピンチヒッターを務めるという2020年以来のシーンがまたも繰り広げられることになり，東京フィルハーモニー交響楽団がコロナ禍からの復活の目玉公演と位置付けていた名誉音楽監督チョン・ミョンフンが指揮するマーラーの交響曲第３番の定期演奏会や，東京二期会がペーター・コンヴィチュニーの演出で予定していたボン歌劇場との共同制作による《影のない女》のワールド・プレミエなど，重要な公演が中止に追い込まれた。一方で入国禁止措置がとられる前に来日していたユベール･スダーン，ガエタノ・デスピノーザ，ジョン・アクセルロッドといった指揮者は滞在を延長して年始まで日本に留まり，来日不可能となった指揮者の穴を埋めるといった事例も起こった。結局は海外からの規制にもかかわらず，日本でも爆発的に感染者が増えてしまったが（第６波），幸いコンサートについては自粛要請がほぼなされず，内容変更はあっても基本的になんとか開催自体は続けることができたことは，前年からの大きな進歩だったといえよう。

■回復に向けて

そしてまだ第６波が収まっていない３月に入国に関する規制が緩和されるようになると，音楽界の状況も好転する。外来アーティストの来日が増え，３～４月の東京・春・音楽祭には前年に引き続きリッカルド・ムーティが来日して開幕を飾るとともに，前年には中止に追い込まれた演奏会形式のワーグナー・シリーズも復活し，マレク・ヤノフスキの指揮で《ローエングリン》を上演した。５月の別府アルゲリッチ音楽祭や宮崎国際音楽祭も無事に開催され，前者ではマルタ・アルゲリッチが健在ぶりを示している。６月にはアルゲリッチとギドン・クレーメルの室内楽の演奏会をはじめ，外国の名手が続々と日本を訪れ，またシャルル・デュトワが大阪フィルハーモニー交響楽団と新日本フィルハーモニー交響楽団を振って成果を示すなど，次第に音楽界は賑わいを取り戻していく。５月下旬から６月下旬にかけて仙台国際音楽コンクールが予定通りに開催され，世界の様々な国から参加者と審査員が来日，大きな盛り上がりをみせたことも特筆すべきだろう。

特に難しいと思われていたのが，大所帯であるオーケストラの来日だったが，７月にはフランソワ＝グザヴィエ・ロトの率いるケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団の来日が実現，これは秋に向けて海外オーケストラ来日の先駆けとなる。

一方でこの７月には感染の第７波が到来，日本のオーケストラでも楽員の感染が多発し，各楽団は対応に追われることとなった。しかしそれにもかかわらず，他の楽団の奏者やフリーの演奏家に代役を依頼して演奏会の開催を継続し，以前のように中止にするということがほとんどなかった。あるオーケストラの公演など，木管セクションのトップ奏者がみな感染してしまい，すべて他の楽団からのエキストラに代わっていたという例もあったほどだ。２年にわたるコロナ禍において，楽団どうしがお互いに助け合っていこうという連帯意識が作り上げられ，なんとか事態を乗り越えようという強い姿勢がみられたことは注目すべきだろう。歌舞伎やミュージカルのジャンルでは出演者に感染者が出た場合に公演を中止するという事例が依然として相次いでいたのと比べて，クラシックの音楽界ではともかくも流れを後戻りさせないという決意が窺えた。

そのことは，霧島国際音楽祭，草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティバル，木曽音楽祭，武生国際音楽祭をはじめとする各地の夏の音楽祭がほぼ予定どおりの内容で開催されたことにも現われている。2021年は途中で中止されるという残念な事態に陥ったパシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌（PMF）も，３年ぶりにPMFオーケストラが結成され，首席指揮者にラハフ・シャニ，客演指揮者にケン＝デイヴィッド・マズアを迎えてこの音楽祭らしさを取り戻したし，前年は開催直前に中止となってオーケストラ・コンサートのみシャルル・デュトワの指揮による無観客配信となったセイジ・オザワ松本フェスティバルも，今回はデュトワが満員の聴衆の前でサイトウ・キネン・オーケストラを指揮，オペラ公演では新鋭の沖澤のどかが《フィガロの結婚》を振って高い評価を得た。

■賑わいを取り戻した秋の音楽界

秋にはそうした回復基調がさらに鮮明になっていく。外来や日本アーティストのリサイタルや室内楽の演奏会，国内のオーケストラやオペラの公演も目白押しとなり，新国立劇場では《ペレアスとメリザンド》，《ボリス・ゴドゥノフ》，《ジュリオ・チェーザレ》など，斬新な演出による優れた公演が続いたのをはじめ，神奈川県民ホールはフィリップ・グラスの《浜辺のアインシュタイン》，神奈川県立音楽堂はファビオ・ビオンディ率いるエウローパ・ガランテを招聘してヘンデルの《シッラ》を歌舞伎の手法を取り入れた彌勒忠史の演出で上演（もともと2020年２月に予定されていながら直前にコロナで中止になった舞台の延期公演）するなど，意欲的な公演が相次いだ。オペラの上演においても，これまでのように歌手どうしのディスタンスを配慮した不自然な演出がされることは少なくなり，一方でカーテンコールの際に出演者が手を繋いで聴衆に応えることが増えてくるなど，コロナ禍でタブーとされてきた本来の公演のあり方が徐々に復活してきた。

とりわけ特筆すべきは，海外のオーケストラの来日公演が本格的に戻って来たことだ。サイモン・ラトル指揮のロンドン交響楽団（９～10月）が東京，川崎，京都，大阪，札幌，北九州を回る全国ツアーを行なったのを皮切りに，クラウス・マケラ指揮のパリ管弦楽団（10月），アンドリアス・ネルソンス指揮のボストン交響楽団（11月），クリスティアン・ティーレマン指揮（もともと予定されていたダニエル・バレンボイムは病気のために降板）のシュターツカペレ・ベルリン（12月）といった歴史あるメジャー・オケが続々と日本を訪れて，名門の名に恥じない名演を披露した。さらにマリン・オルソップ指揮のポーランド国立放送交響楽団（11月），アンドリュー・マンゼ指

揮のＮＤＲ北ドイツ放送フィルハーモニー交響楽団（11月），パーヴォ・ヤルヴィ指揮のドイツ・カンマーフィルハーモニー（12月）なども相次いで来日，秋はコロナ前の海外オケの来日ラッシュを思わせるような状況が生み出された。またネルソンスがボストン響との来日の後，松本と長野でサイトウ・キネン・オーケストラを指揮してマーラーの交響曲第９番を演奏したのも大きな話題である。

■依然として残る課題

このように書いてくると，いかにも音楽界がもとに戻ったという印象を与えてしまうかもしれないが，実際には厳しい状況は依然として続いた。コンサートの客足はコロナ前に比べてまだ充分には回復せず，一部の人気公演こそたしかに満席またはそれに近い盛況ぶりをみせる一方で，集客に苦戦する公演は多く，音楽団体関係者や主催者からは元どおりになるにはまだほど遠いという声を多数聞いた。特に聴衆のかなりの数を占めていた高齢者層がなかなか戻ってこないという。秋以降はウィズ・コロナの意識が広まって，例えばコンサート会場で２年近く行なわれてきた客の分散退場をやめたり，クロークなどを再開するところも出てきたものの，そうした緩和は一部に過ぎず，入場の際のアルコール消毒，マスク着用をはじめとして，様々な感染対策は当然のことながら引き続き行なうことが求められたし，また感染力の強いオミクロン株の流行ゆえに，すでに触れたように出演者に陽性者や濃厚接触者が出ることも多くなるなど，主催者は様々な面での対応が迫られた。

国からの支援としては，前年度に引き続き文化庁の『大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業』が継続され，それが音楽界の活性化に大きく寄与したことは評価されよう。ただコロナで経済的に厳しい状況に陥った団体や音楽家すべてがこうした支援の恩恵に与ることができたわけではないし，国からの補助にしろ，それ以外の公的もしくは民間からの支援にしろ，その制度をうまく活用したか否かの明暗も浮かび上がった。様々な手立てを工夫することでコロナ禍における財政危機を乗り越えられたところもあれば，そうでなかったところもあるというように格差が広がってきた感がある。いずれにしても国は疲弊した音楽界の状況を支援していく政策を今後も維持し，より広い層にそれが浸透していくようなあり方を考えていってもらいたいものである。

■円安やウクライナ戦争～国際情勢がもたらした困難な状況

このようにいまだ様々な課題を残しながらも2022年に音楽界は回復基調に向かったわけだが，それに大きく水を差すことになったのが国際情勢の変化だった。急激に円安が進んだことに加えて，原油の値段が上がり，さらには２月24日に勃発したロシアのウクライナ侵攻のための空路迂回などによって，航空運賃や燃油サーチャージ，貨物運賃などが高騰し，せっかく復活してきた外国の演奏家の招聘はただならぬコスト上昇に悩まされることになった。これはもちろんソリストや指揮者の来日にもあてはまるが，特に影響が大きかったのは大所帯であるオーケストラの来日だ。すでに触れた秋の外来オケも，来日が決定した時点ではこうしたことを予想していなかったので，招聘元は思わぬ負担増に見舞われた。10月のパリ管の公演のように，一度発表されていたチケット価格が発売前に値上げされ，結局東京公演ではＳ席で32,000円，最も低いD席でも15,000円という高額な値段になってしまったという例もあったほどである。それでも多くの聴衆がこのパリ管公演に押し寄せたことは，いかにこのコロナ禍で音楽ファンが外国の一流オケに飢えていたかの現われといえようが，こうしたコスト高が今後も続くとなるとまたも海外のオケの来日が困難になり，さらにチケットの値上がりが演奏会離れを引き起こしてしまうことになりかねない（本稿執筆時点では2023年にはいくつもの一流オケの来日が予定はされている）。

ロシアのウクライナ侵攻は別の面でも音楽界に大きな影響を及ぼした。ロシアの演奏家の来日が難しくなったのみならず，ロシア音楽への反発が起こり，例えば当初プログラムに予定されていたチャイコフスキーの序曲《1812年》がロシア以外の作品に変更せざるを得ないというような事態も起こった，侵攻直後に東京フィルの定期演奏会に登場した特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフはロシアからではなくスイスのパスポートで入国し，スメタナの《わが祖国》の名演を聴かせてくれたが，ロシア人指揮者の招聘ということで東京フィルには嫌がらせや抗議の電話があったという。日本フィルハーモニー交響楽団の指揮者陣の大きな柱である桂冠指揮者アレクサンドル・ラザレフも来日を見合わせざるを得なかった。その後ロシア音楽を取り上げること自体への反発は収まり，また限定的ではあるがロシアから音楽家が入ってくるようにはなったが，戦争終結の道筋がまったく見えない中で，この問題はまだまだ尾を引きそうである。

■ポスト・コロナに向けての動き

特筆したいのは，コロナ禍の中での模索をとおして，ポスト・コロナへ向けての様々な新しい動きが起こってきたことだ。コロナ禍当初ににわかに広まった配信もその一例だが，それ以外にも，これまでいわば制度化されてきた音楽界の様々なあり方や慣習に縛られない斬新な発想による試みが次々となされている。一時期活動が止められてしまったことがかえって新たな気持ちで音楽に取り組もうという姿勢や，これまで当たり前と思われていた演奏のあり方，公演や組織のあり方に対する問題意識を生み出し，そうした動きにつながったと思われる。そのひとつとして挙げられるのが，ピアニストである反田恭平が設立した「ジャパン・ナショナル・オーケストラ」の活動だ。2021年に株式会社となったオーケストラで，ソリスト級の精鋭メンバーを集めて奈良を拠点に全国ツアーを展開，将来的には音楽院の創設を見据えるなど，これまでにない形のオーケストラをめざしている。起業家・経営者としての才を音楽活動に生かし，優れた音楽家たちの活躍の場を創出しようという反田のこうした試みは画期的といえよう。またYouTubeをとおして夥しい数のファンを持ち，クラシックのみならず様々な分野をまたがる広い視点から新たな音楽のあり方を追求するピアニストの角野隼斗の活動も注目される。

そうした動きは音楽祭にも現われた。既存の音楽祭とは違ったスタイルの音楽祭をめざして，コントラバス奏者の布施砂丘彦が「箱根おんがくの森」，フルートおよびフラウト・トラヴェルソ奏者の柴田俊幸が「たかまつ国際古楽祭」を創始，今後の発展が期待される。

外国人演奏家の来日が復活してきた2022年だったが，コロナ禍以後日本の音楽界を支えてきた日本人演奏家たちも引き続いて健闘した。特に若手の活躍にはめざましいものがあったが，ここでも際立っていたのは，ピアノの藤田真央，指揮の原田慶太楼など従来の枠にはまらない独自の表現を追求する個性派で，音楽界にフレッシュな風をもたらしている。

思えば2020年に緊急事態宣言が発令された頃は，楽団やオペラ団体，マネージメント会社などが次々と潰れていくだろうと囁かれたものだが，結局ほとんどすべてがコロナ禍の苦しい日々を必死に乗り越えて生き残り，意欲的に活動を再始動させている。今やポスト・コロナに向けて音楽界全体が再構築されつつあるといえるだろう。